

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04275

研究課題名（和文）大正から昭和初期の仏教日曜学校で展開された児童文化活動をめぐる総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Cultural Activities for Children in Buddhist Sunday Schools from the Taisho to the Early Showa Period

研究代表者

中地 文（NAKACHI, AYA）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70207819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、大正期から昭和初期の仏教日曜学校で展開された児童文化活動について、特定の地域や宗派に限定せずに調査を行い、その実態と意義を究明した。仏教童話の制作・発表・研究状況の調査・検討も行った。

児童文化活動の内容は、大正中期以降、多彩なものとなったが、宗派による違いは大きくないことが確認できた。一方、特色のある活動を行っていた日曜学校があることも判明した。児童文化活動の在り方と意義に対する認識には二つの立場があるが、それは宗派による違いではなく、通仏教主義か一宗派主義か、宗教的か宗派的かという日曜学校の目的に対する議論と関係している。その議論には、社会状況や教育問題の影響も認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仏教日曜学校に関して宗派や地域を限定せずにその全容に迫ろうとする調査は、昭和初期以降、行われてこなかった。仏教日曜学校における児童文化活動の実態や意義の研究も、まだ特定の地域に焦点を当てたものしかない。本研究は、そのような研究の空白を補ったという点で学術的意義を持つ。

本研究の社会的意義は、過去の事例の検討を通して、児童文化活動とは何か、大人はそれにどうかかわるべきかを考える材料を現代社会に提供するところにある。先行き不透明な現代において、子どもの情操を育む児童文化活動への関心は高まっており、児童文化活動の在り方や課題を探る際に本研究の成果は活用できるだろう。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated the cultural activities for children that were conducted at the Buddhist Sunday School from the Taisho to the early Showa period, without limiting them to specific regions or denominations, and clarified the actual situation and significance. I also researched and examined the production, publication, and research status of Buddhist literature for children.

Cultural activities for children that were conducted at the Buddhist Sunday School have become more diverse since the middle of the Taisho Period, but there is not much difference between the different denominations. This was confirmed. On the other hand, it was also found that there were Sunday schools that had distinctive activities. There are two positions on the perception of the significance of cultural activities for children. It has to do with the debate over the purpose of Sunday School. It was found that social conditions and educational issues also influenced the debate.

研究分野：児童文学・日本文学・児童文化

キーワード：仏教 日曜学校 宗教教育 社会教育 児童文化 児童文学 仏教童話 宮沢賢治

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

大正期に全盛時代を迎えた仏教日曜学校では、宗教的講話以外にお話会や児童劇、遠足等も行われていたが、その実態、および児童文化活動が行われた経緯、背景や意義等の研究はあまり進んでいない。愛知の児童文化活動と仏教日曜学校との関わりに注目した論考として磯部孝子「仏教日曜学校の成立と口演童話活動（愛知の児童文化に関する研究（その3）」）（『文化科学研究』1995）があり、宮城において「子どもたちが児童文化に接する場として日曜学校が大きな役割を果たしていたこと」を具体的に論じた研究に加藤理『「児童文化」の誕生と展開』（2015）があるが、これらが示している通り、仏教日曜学校で展開された児童文化の研究は特定の地域の事例の調査・考察にとどまっている。

そもそも仏教日曜学校の歴史や活動内容については、これまでに浄土真宗本願寺派少年連盟が自派の活動の歴史を『日曜学校沿革史—本願寺派少年教化の歩み』（2007）に纏めているものの、特定の宗派に限定せずに全国各地で展開した種々の活動全体の流れを把握することは、十分に行われてこなかった。大正期から昭和初期にかけての仏教日曜学校を振り返った論考として、昭和初期に発表された神根愼生「仏教日曜学校」（『宗教々育講座』1929）や大関尚之『仏教日曜学校の革命』（1935）があるが、以後、総括的研究は進展していないのが実情である。

そこで、本研究では、特定の宗派や地域に限定せずに仏教日曜学校の開設状況・活動状況の総合的な調査を行い、それを踏まえて大正期から昭和初期に仏教日曜学校で展開された児童文化活動の実態と意義を究明しようと考えた。

なお、この研究を思い立った背景には、宮沢賢治がその創作を目指したと手帳に記した「法華文学」の解明に取り組む中で、大正期には児童の宗教教育が盛んであったこと、大正期の児童文化において仏教日曜学校が重要な役割を果たしていたことに気づいたということもある。当時の仏教日曜学校の関係者が語る童話観と宮沢賢治の童話観とに共通点があることを確認した（中地文「宮沢賢治「雪渡り」考—法華文学としての童話の試み」『宮沢賢治の深層—宗教からの照射—』2012）が、宮沢賢治が実際に仏教日曜学校の存在を意識していたのかどうか、所属していた宗教団体国柱会の児童文化活動と賢治童話とは関係があるのかどうか等々の問題は、仏教日曜学校の実態が判明しないと解き明かせない。その解明もねらって、この研究を企画した。その意味で本研究は、仏教日曜学校史の研究であり、児童文化史の研究、仏教童話の研究であるとともに、宮沢賢治研究とも繋がりを持つものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本における宗教と教育・児童文化との関わりを探る研究構想の一端を担うものであり、大正期から昭和初期にかけて仏教日曜学校で行われていた児童文化活動について、実態を調査するとともに、その背景や意味・意義を解明することを目指すものである。

具体的には、明治末から昭和初期における仏教日曜学校の開設状況と活動状況について、特定の宗派、地域に偏ることなく調査し、どの宗派がどの地域で、どのような考えのもと、いつからどのような児童文化活動を行っていたのか探る。子ども観や、宗教教育観、児童文化活動をめぐる考え方の諸相、課題意識等も確認し整理する。また、仏教日曜学校で紹介・活用されていた童話・童謡を把握するとともに、いわゆる仏教童話・童謡・仏教児童劇の制作・発表状況と作品の背景にある考えも調査する。そのうえで、仏教日曜学校における児童文化活動の内容と理念の変遷を明らかにし、それが当時の社会状況の中でどのような意味・意義を持つものなのか、キリスト教日曜学校の活動や大正自由教育・児童芸術運動からの影響等にも目配りしながら考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、第一に仏教諸宗派が明治期から昭和初期に発行していた新聞・雑誌等の調査を行い、仏教日曜学校関係の情報を収集した。特に、浄土真宗本願寺派による『日曜教園』『日曜学校研究』、浄土真宗大谷派による『救済』『児童と宗教』、真言宗による『六大新報』、純正日蓮主義・国柱会の『天業民報』等は丁寧に確認した。

第二に、大正期に刊行された児童の宗教教育をめぐる研究書や日曜学校の理念・経営に関する書物の内容を検討し、宗教教育に対する当時の考え方や日曜学校の理念と方法を探った。日曜学校講習会講義録等の内容も検討した。

第三に、仏教関係の雑誌・書籍等の記事をもとに仏教日曜学校で紹介・活用されていた童話・童謡を調べるとともに、児童の教化を意識して創作された所謂仏教童話・童謡・児童劇の発表状況の確認と内容把握を行った。仏教童話をめぐる当時の研究の内容確認、および童話を提供する際の手法をめぐる研究状況の把握も行った。

第四に、仏教日曜学校の意義を、当時の子どもを取り巻く文化環境に照らして明らかにするために、キリスト教日曜学校の調査や、仏教社会事業の展開の確認、大正自由教育および児童芸術運動との関係の検討に取り組んだ。また、仏教日曜学校が行われていた地域をいくつか選定し、その地域の市町村史や郷土資料、新聞等に目を通した。

以上の調査・検討を踏まえて、第五に、仏教日曜学校における児童文化活動の実態とその活動をめぐる考え方を整理し、宗派との関係の有無を探るとともに、明治末から昭和初期に向けての動きとその意味・意義を考察した。

#### 4. 研究成果

本研究の主な成果を以下に整理して示す。

(1) まず、仏教日曜学校の開設状況についてであるが、「少年協会」「児童協会」も日曜学校に含めるならば、明治10年代の後半から開設され、明治20年頃から全国的に普及したことが確認できる。日曜学校という名称が使われるようになるのは明治30年代からであるが、宗派によっては日曜学校の名称が一般的になる大正期以降も「日曜コドモ会」「少年会」の語を使用している場合もあり、日曜学校を名乗るものだけを確認すれば済むというわけにはいかないことがわかった。その意味で、厳密な数の把握は困難といえるが、浄土真宗本願寺派による『第一回日曜学校講習会講義録』(大正5年)によれば、同派の日曜学校数は当時773校であったという。また、大正15年刊行の『本派本願寺関係社会事業便覧 第3輯』には日曜学校数1,503とある。これらから、大正年間に日曜学校数は着実に増えていったことが明らかである。さらに、昭和元年文部省宗教局調によれば、日曜学校数は3,013で、宗派別では浄土真宗本願寺派が最も多く、以下、数の多い順に浄土真宗大谷派、浄土宗、曹洞宗、日蓮宗、臨濟宗、天台宗、真言宗となっている。浄土真宗に関しては、大谷派が県別の統計資料を残しており、滋賀県に多いなど県別の特徴があること等もわかった。仏教日曜学校の開設状況は、宗派別、県別にみた傾向や、当時の小学校数に対する割合を算出できる程度に把握できたといえよう。

(2) 次に、仏教日曜学校における児童文化活動の実態についてであるが、お伽噺を語り聞かせる「お話」を入れたプログラムは明治末から確認できる。大正期から昭和初期の実態としては、多くは「讃仏歌」「訓話」に加えて「お伽噺」「童話」を語る形式を通常とっていたこと、遠足等の行事が時々あったこと、作文を綴らせるなど児童の表現活動に力を入れる日曜学校や「顕微鏡下の世界」など科学的な話を講話に加える事例もみられることなどを把握した。また、「花まつり大会」「児童大会」「コドモ大会」「お伽会」等の行事が定期的開催され、お伽噺のほかに絵ばなし、童話劇、対話劇、表情遊戯、童謡遊戯、合唱など多彩なプログラムが組み立てられていたこと、子どもによる児童劇や遊戯、歌を中心とする実演会もひらかれていたこと、童謡・童話や児童の綴方を掲載する雑誌の発行も行われていたこと、童謡・童話、児童の自由画の募集も行われていたこと等も確認し、当時の児童文化活動の中心的役割を仏教日曜学校が積極的に担っていたという結論を得た。児童図書館、児童文庫の設置が行われている場合もあり、初期の子ども読書支援として注目される。この調査で得た成果は市民講座で披露することができた。

(3) 児童文化活動に対する仏教日曜学校関係者の考え方の整理から見えてきたのは、相反する二つの考え方があったということである。一つは、児童文化活動こそ子どもの心理にそくしたものであり、直接仏教に関係しなくても子どもの宗教的情操を養うのに適しているという考えである。もう一つは、お伽噺では宗教的教化の徹底は困難であり、日曜学校は宗教教育の機関であることを自覚してプログラムを見直すべきであるとする考えである。これら二つの考えがどこから生まれてきているのか探り、次のような答えを得た。すなわち、これらは宗派の違いによって生まれたものではなく、むしろ宗派を超えて、日曜学校の理念・目的にかかわる問題として提起されてきたとみられる。前者は、日曜学校とは宗教教授の場ではない、既成の宗教や宗派に煩わされない宗教教育の場、宗教的信念を育てる場でなければならないとする立場から語られている。一方、後者は、日曜学校は宗教的教化の場であり宗派の教えを受け取る場であるとする立場の主張である。日曜学校の在り方をめぐっては、大正前期に「通仏教か宗派か」が議論され、昭和初期には「宗教的か宗派的か」が論点となったと言われるが、そのような日曜学校の目的をめぐる議論が児童文化活動に対する考え方に影響していると捉えた。

(4) 仏教日曜学校で紹介・活用されていた童話・童謡の把握は、行事のプログラムや、宗派の雑誌での作品紹介から行ったが、当時の教育界で紹介されていたものと重なるという結果を得た。宗派の雑誌では教育思想の紹介も多く、教育界の動きは強く意識されていたと考えられる。いわゆる仏教童話・童謡・仏教児童劇の制作・発表については、大正期に盛んになり、昭和初期には全集の形をとるに至ったこと、仏教界の側で仏教童話研究がすすめられたのも昭和初期であること、提供の仕方の研究も行われたことを確認した。今日まで読み継がれる作品がほとんどない理由の探究は、今後の課題として残っている。宮沢賢治のいわゆる「法華文学」との違いはどこから生じたのかという問題についても、今後考察を深めたい。「法華文学」としての賢治童話の読み方については、令和元年度に宮城県の子ども読書活動推進担い手交流会で講演する機会を得た。

(5) 仏教日曜学校における児童文化活動の意義については、キリスト教日曜学校関係文献の検討や、大正期の児童芸術運動の歴史と実態の把握、仏教社会事業の展開の調査等を経て、次のような考えを得た。

①キリスト教日曜学校に比して仏教日曜学校では多彩な児童文化活動が展開し、都市だけでなく地方での活動も盛んだったが、この点は多くの子どもに文化を提供し得たという点で評価できる。

②大正7年の児童文芸誌『赤い鳥』創刊以降に活発となる大正期の児童芸術運動に先駆けて、仏教日曜学校関係書には大正初期から児童中心主義の童話論が提示され、また仏教童話の創作への取り組みが開始されているが、これは大正児童文学の形成を考える上で注目される。

③仏教児童文化活動の展開とともに、児童図書館・児童文庫の開設など施設面における児童文化の進展も同時に進められたことは、児童文化史において重要であるだけでなく、子ども読書支援の歴史のなかで評価すべきである。

④社会事業とのつながりも確認できるが、この点はセツルメント運動に先行する動きとしての意義を持つ。

⑤仏教日曜学校における児童文化活動の展開には、海外の教育思想の影響などがみられるが、それは仏教界の近代化の動きを検討する材料となる。

仏教日曜学校における児童文化活動の意義の究明に際して行った、大正期の児童芸術運動の検討の成果は、児童文芸誌『赤い鳥』創刊 100 年にあつた 2018 年に、事典の項目執筆や、大学附属図書館で行った『赤い鳥』創刊 100 年記念展示の企画・構成に生かした。

(6) 以上の成果を踏まえて、仏教日曜学校における児童文化活動の史的展開とその意味を再整理した。最後に、簡潔にそれをまとめることにする。仏教日曜学校における児童文化活動は、明治末にお伽噺がプログラムに取り入れられたことから始まるが、それはキリスト教日曜学校への対抗意識を背景として、より多くの子どもを集めようとするための手段だった。それは程なく変化する。大正初期になると、情操教育が手薄だった明治期の教育を補う役割を積極的に担おうとする意図をもって、児童中心主義の教育思想を踏まえた児童文化活動が進められるようになる。大正中期には、児童芸術運動とも結合して、多彩な児童文化活動が仏教日曜学校を舞台として展開された。その頃、日曜学校や幼稚園等の事業を寺院の社会的存立の近代的意義と捉える意識も生まれていた。しかし、児童文化活動が盛んになる中で、それに対する批判も出てくるようになる。日曜学校の本来の目的は宗教的教化であり、児童文化活動ではなく教化プログラムが必要だとする主張である。大正後期から昭和初期になると、仏教日曜学校の教案・教材が出版され、仏教童話の全集化も進められる。児童文化活動は、児童の精神的陶冶のための活動から、教化プログラムの間の息抜き、娯楽へと、その意味を変化させていった。

(7) 仏教日曜学校における児童文化活動の史的展開は、研究の最後に得た成果であり、まだ論文化して発表していない。今後、発表を実現したいと思う。また、今回、仏教系大学の学生による児童文化活動の検討は行わなかったが、仏教日曜学校とそれは密接なかわりを持っている。その検討が今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中地 文	4. 巻 133号
2. 論文標題 児童文芸誌『赤い鳥』と教科書	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮城教育大学附属図書館ニュースこもれび	6. 最初と最後の頁 8 - 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中地 文	4. 巻 117号
2. 論文標題 大正10年、滞京中の宮沢賢治 - 国柱会と童話と -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 宮沢賢治記念館通信	6. 最初と最後の頁 3 - 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中地 文	4. 巻 事典につき巻号なし
2. 論文標題 小宮豊隆	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『赤い鳥』事典（柏書房）	6. 最初と最後の頁 181 - 182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中地 文	4. 巻 事典につき巻号なし
2. 論文標題 『赤い鳥』と国語教科書	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『赤い鳥』事典（柏書房）	6. 最初と最後の頁 73 - 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中地 文
2. 発表標題 賢治童話の楽しみかた
3. 学会等名 令和元年度みやぎ子ども読書活動推進担い手交流会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤理、大木葉子、中地文
2. 発表標題 『赤い鳥』と教育・児童文化
3. 学会等名 宮城教育大学附属図書館『赤い鳥』と教科書展関連行事
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中地 文
2. 発表標題 子ども読書支援の過去・現在・未来
3. 学会等名 仙台市大沢市民センター・ブックトークボランティア養成講座（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中地 文
2. 発表標題 子どもの読書のこれまで・これから
3. 学会等名 塩竈市平成27年度家庭教育支援総合推進事業（教育委員会教育部生涯学習課）（招待講演）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中地文・監修	4. 発行年 2016年
2. 出版社 岩崎書店	5. 総ページ数 176ページ
3. 書名 賢治童話ビジュアル事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----